

## 音楽と人間の相互作用の可能性

### トランシルヴァニアにおけるジプシー音楽の引き起こす経験について

林美鈴(一橋大学大学院)

「音楽」を人類学的に分析するとはどういうことだろうか。これまで人類学において「音楽」は儀礼的、宗教的な場面における要素として取り上げられてきた。また、音楽人類学の分野では当該社会の人々と音楽の独特な関係性についても論じられている。本発表もこれに倣すものである。

本発表のテーマである、「ジプシー・ミュージック」は今日、「ワールド・ミュージック」の一ジャンルとして世界的に知られるようになった。それに伴い一部のジプシー出身の音楽家の社会的地位も向上し、文化復興運動の一環として彼らの音楽は時に戦略的に用いられてきた。しかし、これまでその多くは「民族音楽」の枠内か、「ワールド・ミュージック」の商業化として語られる傾向があった。「民族音楽」は民族が生来的に持つ「アイデンティティ」が彼らの音楽の才能の基盤となっているという説明で終わらせてしまうような本質主義的な側面があり「ジプシー」についてはそれが顕著である。「ワールド・ミュージック」は、その分析対象がプロ/アマの絶対的な境界の存在を前提としたうえで一部の「プロ」ジプシーミュージシャンの音楽であり、「プロ」ではないジプシーミュージシャンの活動もあくまでインディーズの商業化へのプロセスとして語られがちである。また、近年の本質的な「民族音楽」批判以後は、「グローバル」な音楽との文化的接触によって「ローカル」な音楽が変化する、あるいはその逆の影響、といった音楽性やアイデンティティの変化に焦点が当てられている。

ルーマニアでは、革命後の20世紀以降「ムジカ・チガネアスカ」と呼ばれる民族音楽としての「ジプシー・ミュージック」が国外の人々を中心に享受されるようになる一方で、「マネレ」と呼ばれるジプシー発の歌謡曲が生まれ、一部のルーマニア人やジプシー(Tigan)を中心に支持されている。しかし、同じジプシー発でありながら、「ムジカ・チガネアスカ」とは違い、これまでに知られてきた「ジプシー」的な音楽要素を踏襲しつつもシンセサイザーを用い、ラップや日本語さえも引用する「マネレ」のスタイルは、旧来のジプシー音楽家やファンの批判的となっている。更に彼らのお金目的とも取れる販売戦略やパフォーマンスもあいまって、国内でもマネレを「醜く悪い音楽」として非難する声も多い。

このような動きは先の「グローバル」、「ローカル」の文脈で捉えるなら、「ワールド・ミュージック」によって影響を受けた「ジプシー・ミュージックの変容」として捉えられるかもしれない。事実、マネレはジプシー音楽の新しい流れの中の一ジャンルとしてしか語られず、実際の支持者やその享受のされ方について焦点が当てられることはなかった。しかし、それでは今日の賛否両論が起こる理由は謎のままである。そのひとつの鍵として、報告者は、ルーマニア国内におけるジプシーを始めとしたマネレの支持層にとって、マネレは単なる聞いて踊るだけの歌謡曲として存在しているわけではないという点に注目する。その背景にはジプシーたちの社会状況はもちろんのこと、その支持層にとっての政治・経済的要因が絡んでいる。何よりマネレという音楽によって引き起こされる音楽と人間の相互作用がもっとも重要な要素として考えられる。

本発表ではミュージシャンをはじめ、「マネレ」を支持する人々を中心とした調査の結果を基に、そのパフォーマンスを含めたジプシー音楽が支持者にとって儀礼的な役目を担っているということを事例と共に検討する。それによってこれまで知られてきた民族音楽として聞くためだけの「ジプシー・ミュージック」にとどまらない、音楽によって引き起こされる人間の経験の可能性について示唆したい。

【音楽、ジプシー、マネレ、トランシルヴァニア、経験】